

令和7年度 第2回伊達市総合教育会議 会議記録

開催年月日	令和7年11月6日(木)		
開会時刻	午後1時30分	閉会時刻	午後3時00分
開催場所	伊達市役所 庁議室		
出席の状況(○出席、×欠席)			
1	伊達市	市長	須田博行 ○
2	伊達市 教育委員会	教育長	渡部光毅 ○
		委員	宍戸弘治 ○
4		委員	貝羽貴子 ○
5		委員	関根勝富 ○
6		委員	中野昭子 ○
事務局	(伊達市) 総務部長、総務課長 (伊達市教育委員会) 教育部長、こども部長、教育総務課長、生涯学習課長、学校教育課長、学校給食センター所長、こども未来課長、ネウボラ推進課長、生涯学習課主幹、こども未来課主幹		
会議内容	<p>1. 開会</p> <p>2. 市長あいさつ</p> <p>令和7年度第2回伊達市総合教育会議の開催にあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。</p> <p>教育委員の皆様には、日頃より本市の教育行政にご尽力をいただいていることに対しまして、深く感謝を申し上げます。</p> <p>総合教育会議は、子育て、教育、学術、文化、スポーツの振興に関する施策について方向性を確認し、それらの振興のための諸条件の整備や、地域の実情に応じた進め方について協議する場でございます。重点的に講ずべき施策等について、委員の皆様としっかり協議をしてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。</p> <p>初めに、本市の教育行政の近況について申し上げます。</p> <p>7月30日から8月1日までの3日間において、北海道松前町との交流が行われました。松前中学校と梁川中学校の生徒</p>		

の交流でございます。これは平成 28 年から毎年、両中学校の生徒会の生徒が相互に訪問をして交流を行っております。今年には松前中学校の生徒を伊達市に迎えて、松前ゆかりの地の見学、生徒同士の交流会、そして桃の収穫体験などを行いました。お互いの市・町の歴史、文化、産業を学び、生徒同士の友好を深め、大変有意義な交流になったと考えております。

9月2日に、生徒指導研修、不登校研修を市内の小中学校の教員 28 名が参加して行われました。不登校の現状や取り組みについて情報共有をし、不登校対策を協議したところでございます。

9月27日にはD20 サミットを議場で行い、市内小中学校の代表者 20 名が参加をいたしました。伊達っ子の誓いの 5 つのテーマにつきまして、意見発表をいただきました。伊達市の良い点、課題を子供たちはよく捉えていると感じました。子供たちの貴重な意見を聞くことができ、これからの施策に反映していきたいと思っております。

10月14日には梁川小学校講堂におきまして、歴史文化講演会を実施し、伊達氏が本拠地とした桑折町、米沢市、仙台市の方に参加をいただき、講演会を行いました。伊達市の歴史を非常に深掘りしていただきました。今後、関係する市町と歴史をきっかけとした交流を促進していければと考えています。

さて、本日の総合教育会議におきましては、教育相談事業（不登校児童生徒対策）について、学力向上について、伊達市元気な子ども・みんなの子育て条例に係る取組についての 3 つの議題についてご協議をいただきます。本会議を通して、教育委員の皆様とともに、様々な課題に取り組み、教育施策について協議及び調整を図って参りたいと考えておりますので、活発なご議論をお願い申し上げまして挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

3. 前回協議事項の進捗報告

事務局（学校教育課長が資料に基づき説明）

（こども未来課主幹が資料に基づき説明）

4. 協議（議長…市長）

協議事項（1）教育相談事業（不登校児童生徒対策）について

て

事務局（学校教育課長が資料に基づき説明）

○宍戸委員：本市の不登校児童生徒の理由等で、親子の関わり方に関する問題が突出していると思うのですが、具体的にどういふことでしょうか。

○学校教育課長：こちらに関しては、ネグレクトまではいかないですが、子供に干渉しないような親子の関わり方と掌握しています。

○市長：資料（「教育相談事業（不登校児童生徒対策）について」）の「本市の不登校児童生徒数の経年変化」において、本市では令和6年度の不登校児童生徒数が減少し、本年度においても減少傾向にあると記載があるが、次ページの「本市の不登校の課題」においては、小学校での不登校は増加傾向にあると記載がある。これは、中学校では不登校児童生徒数が減少しているということなのか。

○学校教育課長：おっしゃる通りで、若干ですが小学校が増えています。ただ、合計で減少しているのは、中学校の減少が大きいと見ていただいていると思います。小学校が増えてきた理由としては、コロナの影響もあり、特に低学年の生徒はコロナ禍に集団の遊びをこななかった可能性もあると考えています。中学校が減少している理由としては、就学指導等も進めて、自分に合った学びの場が得られてきているからだと考えているところです。

○宍戸委員：不登校が始まるのは、中学生においては、1年生の夏休み明けからでしょうか。

○学校教育課長：おっしゃる通りで、1年生の夏休み明け、もしくは、2年生で増えてくるのが今までの傾向でした。

○宍戸委員：夏休み明けに不登校になる1つの原因は、中学校はいくつかの小学校が集まって学年が編成されることだと思います。そういったところで、人間関係の難しさというのもあるかと思います。また、東日本大震災前は、宮城県県南の中学校は1年生になるとすぐに相馬海浜に行き、同じ釜の飯を食べ、一緒に泊まって融和を図っておりました。

○学校教育課長：宿泊学習とか体験的な学習というのは、すごく必要な学習経験であると思っています。先ほどのコロナの例ではないですが、子供たちが一緒に遊んだり、一緒にご飯を食べたり、寝たりというのは必要な経験であると考えています。

○関根委員：不登校の理由として色々ある中で、その子に合った対応をしていると思いますが、一番多い理由は、学校生活に対してやる気が出ないとか、生活リズムの不調についてで、この部分が改善されれば学校に行きやすくなるのかと思います。やる気や張り合いを見いだすことについて、例えば、中学生においては部活が大きいと思います。学校生活や勉強が楽しくなくても、部活がやりたくて学校へ行くということもあると思いますし、部活でレギュラーを取るために一生懸命頑張ろうとモチベーションが上がったりすることもあると思います。先ほど報告があった部活動地域移行により、部活動が充実して自分のやりたい部活動ができるし、他の学校の生徒と触れ合うこともできます。また、SSR以外に各学校で別室登校が多いことについて、先生方の負担がなるべく減るような対応を考えていただきたいと思うのですが、どうでしょうか。

○学校教育課長：やる気に関しては、部活動等は中学生にとって大きな学校生活の場面ですし、運動が好きな子は部活動で力を発揮できることが、やる気に繋がると考えているところですが、そのことも含めて部活動地域移行は進めていきたいと思っています。また、やる気が出ないことと生活リズムの不調については、家庭でのスマートフォン等の利用が大きな要因

であると思っています。ゲームや SNS 等を使用して、夜遅くまで起きていると、どうしても眠くなりますし、長時間見ていることがやる気の減少にも繋がっていると思います。この点に関しては、PTA ともタイアップをして、スマートフォンの利用に関して家庭で見直していきましょうという PR を一緒にしています。また、教育委員会で進めているのは、デジタル・シティズンシップ教育という、デジタル機器を使用する際にどんな使い方をしていけばいいかということ、本年度中に進めていきたいと考えています。加配に関しては、人的な配置があると学校にとっては大変助かることなので、これからも県教育委員会の方に要望し続けていきたいと考えています。市では、介助員という会計年度任用職員がいますが、介助員は特別支援教育の介助だけでなく、不登校対応も仕事に位置付けているので、介助員を配置していただいていることは、学校にとっては大きな人材だと考えています。

○教育長：最近の新聞に、国の統計で全国的に非常に不登校児童生徒が増加していて、何とかしなくてはならないという報道が多々ある中で、伊達市として、去年も今年も若干ではありますが数が減っているということは、相当の成果であると考えています。学校だけで解決できる問題ではないので、様々な協力を得ながら、不登校対策をしているところです。また、私も学級担任の経験がありますが、学級に不登校の子供が複数いると、ものすごく担任の先生の負担になります。通常の指導で大変なのに、不登校の子供たちの指導まで行うことになる、ますます学校の先生になりたがる方が減ってしまうのではないかと心配もあります。不登校には様々な理由があり、毎年違った理由になってくるかと思うので、行政や学校、家庭も含めて全体で考えていかないと、この問題を解決することは難しいと思っています。国の方で、SSR という名称ではなく、校内の不登校支援センターという名称で、学校で対応していくという話もあり、関根委員からご意見あったように、それを誰が対応するのかということが課題になります。当然、福島県教育委員会でも考えはあるでしょうし、市としても、学校教育課長からあったように、その介助員を

今後も維持をしていきながら、不登校支援対応を行っていた
だき、少しでも人員を配分できるようにと考えているところ
です。どうしても、不登校児童生徒の数が多或少ないという
部分で判断してしまいますが、市としても精一杯頑張ってい
るところですので、温かい目で見えていただければと思ってい
ます。

○貝羽委員：本市の不登校児童生徒の理由は、本人の回答な
のでしょうか。それとも、保護者または先生から見た内容な
のでしょうか。

○学校教育課長：こちらは、学校への調査ですので、内面的
な理由というよりは、学校が把握した事実からの理由となっ
ています。

○宍戸委員：フリースクールを活用している子もいるような
ので、参考に紹介します。私の教え子なのですが、全国のフ
リースクールのネットワークの代表理事をやっていて、フリ
ースクール白書というものを書いたということで、今回持っ
てきました。これには、フリースクールと自治体や学校との
関係、フリースクールの課題などが書いてありますので、参
考になれば読んでみてください。

○関根委員：不登校であったり、別室登校や SSR だったり、
そういう子供たちの成績や通知表は、どの様な取扱いになる
のか疑問に思ったので教えて下さい。

○学校教育課長：通知表に関しては、その子がモチベーショ
ンとして上がるのであれば評定していくという考えです。逆
に、その評定によってモチベーションが下がるのであれば、
評定をしませんと通知表に記載します。その子にとって、モ
チベーションになるように学校ごとに判断をして進めており
ます。

○教育長：私が中学校にいたときですが、評定を出して欲し

いとなっても、学校に来ていないし試験等も受けてない場合だと評定ができません。なかには学校に来てテストなどを受けて評定できる子もいます。そういう子であれば、評定を出すことでモチベーションが上がるのかと思います。保護者を通して本人が通知表に対して評定をしてもらうか、もらわないかということは、あくまでも学校で決めてもらっているので、対応について市で統一は特にしていない状況です。

○市長：こうした様々な不登校対策を行い、令和6年、7年度についても不登校児童が減少傾向にあるということで、この取り組みをしっかりと進めていきたいと思います。加配については、市や県の教育委員会と話をし、できるだけ訴えていきたいと思います。

協議事項（2）学力向上について

事務局（学校教育課長が資料に基づき説明）

○宍戸委員：伊達市の強みで、小・中学校の連携が非常に密接に行われており、この連携がうまくいっていることが、石川県では学力テストでの成績が向上した要因となっています。また、中学校・高校の連携というのも非常に有効ではないかと思います。高校の強みは専門性、中学校の強みは多様な生徒に対応している指導方法、お互いの情報交換とスキルアップに繋がっていくと思います。他市では、中学校・高校で研究授業を行った後に分科会を行い、中学校において学習障害の児童生徒にどのように学習させればよいのかというテーマについて情報交換をしている事例もあるようで、具体的には、耳で聞いては理解できるが、文字にするのが難しい子にどう教えるかという内容だったようです。高校の専門的な指導は、その子の特性にあった学びを向上させていくことに有効ではないかと思います。

○学校教育課長：中学校・高校の連携も必要だと思っています。ご助言をいただいて、ICT教育の授業研究会には、伊達高校と聖光学院高等学校にもご案内を差し上げたり、伊達市

で行っている小中学校の教員向けの研究会については、高校にも一覧表を渡し、一緒に勉強できる機会を設けたりしているところ。また、学習障害のことは、私たちにあって目から見える情報が一番頭に入るという意識がありますが、その子の特性で耳からの方がいいこともあるし、体験した方がいいこともあります。普通学級にもそのような特性を持つ子もいるという認識のもと、校内や市で研修会を進めているところ。

○中野委員：基本的な生活習慣は身につけているが、自己有用感が低い傾向があることについて、福島県の控え目な人間性が表れているのかと思うのですが、子供たちが自分に良いところがあると思えるような先生方からの指導や教育委員会からの働きかけがあれば教えていただきたいと思います。

○学校教育課長：特別活動的な学級活動や学校行事など、様々な体験的な活動の中で、自分ができると他の子と協力してできるという経験をたくさん積み重ねることも大切だし、特別な場でなくとも、日々の授業において学んだことのアウトプットを行うことで、他の子から、「〇〇さんできているね」とか「〇〇さんと同じ考えだ」という言葉を受けることによって自己有用感を高めていくような経験を積み重ねることも大事だと考え、授業改善のポイント等も作成しているところ。自己有用感を高めるということは、本市だけでなく本県の課題でもありますので、今後も進めていきたいと思っております。

○関根委員：先ほどの不登校の話題でもあったように、中学1年生の夏休みに増加するのは、中学1年生で勉強が難しくなっていくことも原因にあると思います。その他に、時間の使い方や段取りよく物事を進めることに慣れずに学校生活にうまくついていけなくなり、夏休み明けに不登校になる子も見受けられるのかと思います。勉強だけではなく、小学校6年生のときから中学生になったときのリズムを慣らしていくことができれば、いきなり生活が変わるといったこともないの

かと思います。小学校のときから何か意識して取り組んでいることはありますか。

○学校教育課長：同じ中学校学区ごとに、6年生の時にすべきことや中学生になるとすべきことについて、小・中連携を進めています。小学校の良さを中学校に、中学校の良さを小学校に連携できるように学校ごとに取り組んでいます。月舘学園であれば、中学1年生の姿を見ていることで中学校生活になじんでいけるのかと思っています。また、時間を守ったり、段取りをしたりすることは、勉強以上に大切なことで、伊達市市政アドバイザーである横山先生に助言を受けるのですが、子供たちにお手伝いをさせなさいとおっしゃいます。段取りがきちんとわからないとお手伝いはできません。お手伝いができるようになると、学校生活も落ち着いてくるという話をいただき、なるほどと思っています。今後、全体としても何か取り組みできないか考えています。

○貝羽委員：学力向上という話が出ると、どうしても数字に踊らされがちですが、大事なのは数字よりも子供たちの気持ちややる気、そういったものを重視していただきたいなと思います。先ほどの不登校の話と通ずるところだと思いますが、学ぶ楽しさに気づき、学校に行くことが楽しいな、友達と交流するのが楽しいなと思えば自然と不登校の子も減るし、自然と学びたいという気持ちになると思います。学力向上のための対策の1つとして家庭学習の習慣化とありましたが、一律に同じ宿題を明日までにこなしてくるというのは時代遅れなので、せっかく色々なデジタルツールを使っているのだから、その子に合わせた宿題を取り組めればいいと思います。また、家庭学習にそんなにこだわる必要はないのではないかと思います。勉強らしい勉強を家でもやりなさいというのは、今どき方向的に間違っているような気がしています。例えば、計算問題を家で何問やってきなさいという宿題は、少しは数字が上がるのかもしれないですが、数字にばかりとられる入試に合わせた学習になっていて、本末転倒なのではないかと思っています。子供たちがいかに楽しく学べるか、

そこを重視して学力向上に取り組んでいただければと思います。

○学校教育課長：本当におっしゃる通りだと思います。授業が楽しくて、家に帰って、もう少し調べてみようかなという気持ちにさせる授業であれば、本当の意味の学習になると思っております。その様な授業ができれば、素晴らしいし、そんな学校にしたいと思います。

○教育長：貝羽委員から非常にありがたいお言葉いただきました。校長会で、校長先生方には、学力向上をするために、数字を上げることは求めないと言っています。子供たちの実態というのは、校長先生方や学級担任の先生方が一番わかっているのです、その子供たちに合った学力をつけてくださいといつも話をしています。そのためにどうすればいいかとなれば、子供たちの意欲を高めるような先生方の指導が重要だと思います。本市でも研修にかなり力を入れているという話がありましたが、学級担任の先生の指導によって、子供たちは大きく変わります。今、若い先生方もたくさん入ってきていますので、教育委員会の中でも指導のスキルを強化して教えていくということに、今後は力を入れていきたいと思っています。

○市長：学力向上とは言っていますが、数字ばかりではなく、子供たちが自分たちで学ぶ楽しさを身に着けていくことが重要で、そのためには小さなことでもいいので、1つ1つ成功を積み重ねていくと、またやってみようという気持ちになると思います。そのためには、先生方がその気持ちをどう引き出すかというところが重要だと思いますので、若い先生方が早く力をつけていくことが求められているので、よろしくお願ひしたいと思います。

協議事項（3）伊達市元気な子ども・みんなの子育て条例に係る取組について

事務局（こども未来課長が資料に基づき説明）

○宍戸委員：健全育成に関わる実践例として、西郷村を紹介
します。西郷村は、夏休みに少年の主張大会があります。県
大会は中学生が対象ですが、西郷村の少年の主張は、小学校・
中学校だけでなく、西郷支援学校の生徒も発表します。孫が
出ますから、会場は満杯です。そうした取組みは、村民の皆
様の意識の向上にもなりますし、間接的ではありますが、西
郷村として独自に子供たちの主張の場を設けています。さら
に、西郷村の一員だという意識をもってもらうために、県立
の特別支援学校の生徒も対象としています。1つの参考になる
かと思います。

○こども未来課長：参考にさせていただければと思います。
先ほどもご説明させていただいたのですが、伊達市において
は、D20 サミットという事業を行っています。お子さんの意
見を聞かせていただく取り組みといたしまして、だて支援学
校の生徒にも入っていただいて、意見等を聞いたところでした。
そういった点は似ているところがありました。今後も、
どういった展開にしていくか検討させていただければと思
います。

○貝羽委員：今回のD20 サミットを拝聴させていただきました。
面白かったのですが、伊達市に対する気持ちがもう1つ
前に出てきていないような気がしました、つい最近、双葉町
の子供議会に関するニュースを見まして、それが素晴らしく
て、子供が町政に直接意見し、それに対して町長が答える
という議会形式でとても面白く拝見しました。そういった場が、
伊達市でもあってもいいのではないかと思いました。「双葉町
に病院がなくてみんな困っています。町長さんはどう思っ
ていますか」と鋭い質問をしていた場面がありました。伊達市
でも、直接、市長に自分たちが思っていること、困っている
ことを発言する機会があれば、子供たちももっと伊達市の
ことを真剣に考えるし、愛着も湧くし、政治に関する興味も湧
くのではないかと思います。ぜひ興味がある方、参考に見て
みてください。

○こども未来課長：D20 サミットに関しては施策に反映するという趣旨ではなく、子供さんの意見の発表の場として進めてきたところなので、事業の目的に差がありますが、次回開催に向けて検討していければと思います。

○市長：この条例は、子供たちの意見を取り入れて制定し、今回のD20 サミットもそうですが、子供たちの意見を聞く場を設けるということが重要であると思っています。人権を守るということもあるし、まちづくりの視点でも、子供たちの意見を取り入れて施策に反映していけるので、どの様に反映できるかは検討していきたいと思います。この条例についてはこのように進めておりますので、今後とも皆さんの意見をお聞きしながら進めてまいりたいと思います。

15:00 終了